令和４年度

授業改善推進プラン

文京区立本郷台中学校

令和４年度　文京区立本郷台中学校　授業改善推進プラン

第　1　学　年

教 科	① 基本方針・指導の在り方	② 生徒の現状・指導上の課題分析	③ 授業改善の視点	④ 授業改善の具体策
国語	○日本の伝統的な言語文化に親しませるとともに、知識・技能に対する基礎基本の定着を図る。 ○思考力、判断力、表現力等向上のために、考える力を養う指導を展開する。 ○主体的に学習に取り組む姿勢を養うために、自ら課題を見付けて深める機会を多く設定する。	○書写や百人一首に親しみながら学習している。小テストなどを実施しているが、復習が不足しているため基礎基本が定着していない。結果、思考力、判断力、表現力等も深まっていない。 ○約９割の生徒が目標をもって取り組もうとする意欲をもっているが、積極的に取り組んだり、粘り強く、計画的に、振り返りながら取り組むことには課題がある。	○国語に親しみながら学習する機会を積極的に作る。 ○継続的に、粘り強く取り組めるように、計画的に学習に取り組ませる。 ○取り組んだことに対する振り返りを必ず行い、次の活動につながるようにする。 ○主体的に学習に取り組む態度を養うための基盤を作る。	○席書会、百人一首大会の実施。 ○ファイリング、解き直し、ワークシート、計画表の活用。 ○振り返り用紙の活用、相互評価とそのシェアリングの実施。 ○余裕をもって授業準備を行うような雰囲気作り、課題に対してじっくり丁寧に取り組ませる声かけ、ワークシートの整理など学習環境の整備など。
社会	○社会的な「見方・考え方」を働かせることで、知識の概念的理解を促す。 ○「問い」を生み出し、その解決に向け追究する機会を積極的に設ける。 ○「広い視野」に立って考察が深められるよう、少人数によるグループワークや体験的学習を取り入れる。 ○世の中のこと＝社会の現実に目を向け、それをひとごとではなく自分の問題にしようとすることで、主権者意識の醸成につなげていく。	○生徒の授業アンケートからは、「振り返る力」と「創造性」に大きな課題があることが読み取れた。年度当初より、レポートやレスポンスカードによる振り返りを行わせているが、この結果からは、①生徒自身が振り返りを通した学びの深まりを自覚できていないことと、②自分の意見や考えを表現する際に、「実証性」「論理性」「個性・主体性」に優れたものであるかどうか振り返ったり、他者と共有したりする機会が不十分であったことが考えられる。	○「深い学び」の実現のためには、生徒たちが学習や人生において社会的な「見方・考え方」を自在に働かせられるようにする必要がある。そのためには、各単元の学習で生徒が考えた（思いついた）当時の人々や政治・経済・国際社会等へのイメージが積み重ねられる必要がある。そこで築き上げられた世の中に対する生徒一人一人の考えが、学習指導要領に示された「どのように社会・世界と関わり、より良い人生を送るか」という資質・能力の育成につながる。	○社会的な「見方・考え方」を自在に働かせるため、「問い」を生みだす社会科の授業実践に努める。そのための手段として、史資料を活用し、それに対してグループワーク等で「気づき」や「問い」を引き出し、クラス全体で共有していく。 ○レスポンスカードの問いを発展させ、各単元の学習で学んだことを人生や社会にどう生かすかを再考させることで、自らの学びの深まりを実感させ、学習に対する充実感や達成感を味あわせる。
数学	○単元に応じて、課題解決型学習を取り入れる。 ○単元終了時に、振り返りシートを記入させ、学習を調整する力を養わせる。 ○習熟度に応じた授業を実践する。 【ｳｫｰｷﾝｸﾞ】良問を選択し、基礎基本の徹底を図る。 【ｽﾀﾝﾀﾞｰﾄﾞ】基礎基本の徹底を図りながら、適宜応用問題にチャレンジする。 【ﾗﾝﾆﾝｸﾞ】学習状況に応じて、応用問題を行い、思考力・判断力・表現力を重点的に養う。	○算数確認テストから、各コースの観点別正答率をあげて課題を分析すると 【ｳｫｰｷﾝｸﾞ】整数の四則計算は解けるが、分数・小数の計算の正答率が 45%を下回る。また、割合（百分率・歩合）や面積・体積の正答率が20%台であり、ドリルを使った反復演習が必要である。 【ｽﾀﾝﾀﾞｰﾄﾞ】 四則計算（整数・小数・分数）の正答率は 85%を超え、すらすら解けるが、立体の体積や資料の問題（ヒストグラム）の正	○課題解決する場面を多く取り入れ、学び合う時間を確保する。 ○単元ごとに、振り返りシートをこまめに書かせる。 ○習熟度コース毎に、身につけたい力を明確にして、授業の質を高める。 ○正負の数、文字式、一次方程式の計算演習を増やす。	○自力解決後の学び合いで、多様な考え方を知り、その良さを理解する機会を多くつくる。 ○振り返りシートを単元ごとに記入し、学習調整力を育成する。 ○各コースの授業で単元毎に「身につけさせたい力」を具体的に示し、それぞれの課題に対して、生徒が主体的に学ぶ授業を展開する。各コースの具体策を示すと以下のようになる。 【補充】計算技能の定着を図りながら、思考力を養う良問を選出し、主体的に学ぶ機会を

	【共通】できるだけ多くの生徒に発問し、生徒の理解度を測り言語活動の充実を図る。授業ノート以外に、試験後のレポートを課し、途中式や考え方をきちんと書かせ、根拠を明確にして解く習慣をつける。	答率は 65%を下回る。また、文章題など、学んだ知識を利用して解決する問題の正答率が低く、対応が必要。 【ﾗﾝﾆﾝｸﾞ】 計算、割合、面積、体積、資料の活用などの単元において、正答率が 90%台となった。課題解決型学習で、様々な角度から解法のアプローチをしたり、学んだことを生活や学習に生かすことが課題。		多くつくる。 【標準】思考力を養う演習をこまめに取り入れ、グループで課題解決学習をする機会を多くつくる。 【発展】様々な知識を活用する応用問題を取り入れ、思考力・判断力を強化する。 ○ワーク・計算ドリルをこまめに課し、計算力を向上させる。
理科	○学習内容と日常生活を関連付けることで、生徒の興味・関心を高め、意欲的に学習に取り組めるようにする。 ○実験・観察を計画的に行い、基本的な技能を身に付けるとともに、実験プリントの作成を通じて思考力・判断力・表現力の育成を図る。 ○実験・観察の結果を分析する際、既習事項を活用し科学的な根拠を示して話し合いや発表ができるよう、意図的に言語活動の場をつくる。 ○ふり返りシートを用いて、単元ごとの学習について自らふり返る機会を設け、日常の学習にフィードバックする。	○授業規律については概ね身に付いてきているが、授業に意欲的に取り組んでいるかとの質問に肯定的に回答した生徒は 75%で、生徒の興味関心、および意欲の向上が課題である。 ○授業の課題やプリントへの記入などに十分に取り組めていない生徒、自らの疑問や課題を解決する意欲の低い生徒がそれぞれ 11%程度、日常的に理科の学習に取り組んでいる生徒は 60%弱にとどまっていた。 ○定期考査では平均点が 50 点を割り、既習事項の定着に課題があった。特に、科学的な思考や表現力の正答率が低いこと、得点にも生徒間に大きな差があったことは課題である。 ○科学的な根拠にもとづいて思考したり、発言したりできている生徒は 65%程度にとどまっており、思考力・表現力を意図的に育てる場面づくりが必要である。 ○ICT 機器の活用、特にタブレットの活用は不十分である。	○授業規律は引き続き徹底し、落ち着いた中で授業が行える環境をつくっていく。 ○既習事項の定着が不十分な点については、40%超の生徒が日常的に理科の学習に取り組んでいない現実があり、意欲との関連も否めない。そこで、まずは基礎基本の定着を目指して、生徒の興味関心を高める授業の工夫、家庭学習の取り組みをする。 ○授業中のプリントや課題への取り組み状況が十分ではないので、生徒一人一人の様子をきめ細かく見ていく。 ○実験や観察を行うにあたっては、支援員の協力も仰ぎながら、生徒の実態にあわせて必要な補助を行い、安全に実施できるようにする。 ○実験や観察の際、結果を分析して科学的な根拠にもとづいて発言や発表をする場面を意図的につくっていく。 ○タブレット端末を活用できる場面を授業で設定する。	○始業、終業のあいさつを徹底し、落ち着いて授業ができる環境をつくる。 ○基礎的な学習事項の定着を目指し、定期考査以外にも小テストを実施し、知識・技能の定着を図る。 ○プリントや課題の記入状況は小まめにチェックし、不十分な生徒に関しては支援員の協力も仰いで適切な支援を行っていく。 ○２学期以降は実験・観察が増えるので、生徒が意欲的に活動に取り組み、安全に実施できるように実験方法を工夫する。 ○実験や観察の結果をもとに科学的な根拠をもって自らの考えをまとめ、発表する場を意図的に多く設定する。また、良い例を全体に示して生徒の一助とする。 ○実験・観察、発表の場面において、タブレット端末の活用場面を設定する。
英語	○身近な話題の対話や描写を聞いたり、読んだりして、内容を理解できるようにする。 ○学習した英語を自身の言葉として再話したり。場面を１～２文で描写できるようにする。 ○自分や身近な出来事について、既習の語句や文構造を使って、10 話程度で話したり、２～３文で書くことができるようにする。 ○教科書で学習した語句、文構造を学習活動・言語活動を通して身に付けさせる。 ○音読筆写、語彙や文構造の復習を中心に、授業と家庭学習を関連させ、学習習慣を身に付ける。	○音声を聞く活動には慣れているが、音と文字の結びつきが難しいと感じる生徒が多い。 ○１文程度で自分について話すことはできるが、複数の文で話す練習が必要である。 ○自己紹介のスクリプトを書き、練習した後に４～５文で自身について表現することができた。 ○言語活動の取り組みにくらべて、語句や文構造の学習が難しく感じる生徒が多い。 ○家庭学習の進め方は理解しているが、ていねいに取り組む態度が必要である。	○聞くこと・話すことの活動と読むこと・書くことの活動を統合的に指導する。 ○話すこと（やりとり）の活動において、意味につながりのある文をもう１文付加させる。 ○話すこと(発表)の活動ではスクリプトを書くことの活動で語数を意識してを作成させる。 ○語句や文構造の学習は授業で複数回学習させる機会を設定する。 ○授業での学習を踏まえた上で、内容・量とも無理のない家庭学習を提示する。	○教科書”Listen”の音声をスクリプトで確認する。“Speak”で使った文をノートに書く。 ○授業冒頭の Small Talk や教科書”Speak”で、質問に対して２文以上で答える練習をする。 ○発表スクリプトや作文では２学期は 20 語以上、3 学期は 30 語以上を目標に、まとまった内容を書き表せるようにする。 ○教科書各パートで文の意味と構造を簡単に理解し、単元末で詳しく学習させる。 ○家庭学習は次の授業で提出させる。
音	○パートリーダーの育成を図ることや、グループ・ペア活動を通して、主体的な学習が	歌唱、鑑賞、創作の領域では意欲が高い。男子は変声前の生徒が多く、男声の低音で苦	○発声や音楽理論などの基本的な技能の指導を行う。 ○それぞれの生徒が自分の思	○各学習の目標や視点を明確にする。 ○教材や教具を充実させる。

楽	できるようにする。 ○表現「歌唱、器楽、創作」と鑑賞領域を関連付けて指導する。 ○学習発表会などの行事や授業内発表など、一つ一つの学習項目に目標をもたせ、達成感を得られるように指導する。	労している生徒については、女子の音域で歌うよう指導している。女子は喉を使って歌う生徒が目立ち、息をたっぷりと使い、響きある声を意識させる。また、音符や音楽記号などの知識理解については、個人差がある。期末考査や創作、鑑賞の「紹介文」にそれが表れている。	いや意図をもって表現ができるように曲想について考え、話し合う時間を増やす。 ○グループ学習、ペア学習を通した主体的な学習ができるように指導を行う。	（楽曲教材やＡＶ機器、アクティブボードなど） ○合唱指導においては、振り返りシート、アドバイスシートを使用する。
美術	○学年を単位として集団で学ぶことを理解し授業規律を周知する。 ○「知識、技能」の造形的な視点を豊かにするために必要な「知識」を ICT、等の活用で指導する。「技能」では制作手順を考えながら見通しをもって表すよう「制作記録」の活用を図る。 ○「発想や構想の資質・能力」の向上を目指しワークシートやポートフォリオ等を通じて生徒の思いや創意工夫など明確にできるよう指導する。 「鑑賞」では生徒の見方、感じ方がどのように変化したか、それを生徒自身が自覚できるよう図る。 ○「主体的な学習に取り組む態度」では相互評価や自己評価を学習記録や振り返りカード等に工夫し成就感や課題意識を引き出す。	○授業規律についてはおおむね身についてきているが生徒授業アンケートで「授業に意欲的に取り組んでいる」と答えた生徒が 32%にとどまった。「あまりあてはまらない」の 32%の生徒への指導、支援が必要である。 ○「知識」では生徒授業アンケートの「プリントや資料類は効果的か」に 80%以上の生徒が「あてはまる」「おおむねあてはまる」と答えているが ICT 機器の活用やタブレットの活用が不十分であった。 「技能」面では生徒授業アンケートの「計画性」が他の項目より 80%弱と低くなっているので見通しをもって授業に取り組ませる。 ○「鑑賞」ではグループワークをする時間が確保できず「コミュニケーション能力」について 達成率は 80%と低かった ○「主体的な学習」については 85%以上の生徒が目標をもって授業に取り組もうとする意欲はあるが「計画性」「粘り強さ」「コミュニケーション能力」には課題がある。	○授業規律は引き続き徹底し落ち着いた中でアクティブな学習場面と集中して制作に取り組める場面と環境を設定する。 ○授業に生徒たちは教員の話を傾聴しているが理解しながら話を聞こうとしているか、発問を工夫し「知識」を「暗記」するものだけにならないようにする。また ICT 機器の活用やタブレットの活用を題材に応じて設定する。 ○授業中のプリントや制作中の作品を個別に把握していく。 ○見通しをもって学習に取り組めるよう「制作記録」や「授業ノート」など生徒自身が学習の経過から変容がわかることが必要である。	○ストップウオッチや提示カードなど授業のメリハリが明確に伝達できる工夫をする ○プリントや制作中の作品は丁寧にチェックし不十分な生徒には適切な支援をおこなっていく。 ○ICT 機器の活用やタブレットを有効に活用する。 ○「制作記録」や「授業ノート」など継続して使用することで理解が深まっていることがわかる書式の工夫。
保健体育	○授業の規律（集団行動）を徹底し、安全に配慮をする。 ○運動量を十分に確保し、基礎体力・基本技能を身につけさせる。 ○全体指導と併せて技能別での活動を取り入れ、個々の課題解決に向けて取り組ませる。 ○グループ活動で学び合い、互いのよさをみつけられるようにする。	○多くの生徒が授業の規律を守って活動している。また、生徒授業アンケートで、「授業中意欲的に取り組んでいる」と答えた生徒が 77.4%だった。残りの 22.6%の個々への指導・支援が必要である。 ○基礎体力・基本技能、運動に関する知識が身についていない生徒が多い。また、口頭での指示が理解しにくい生徒がいる。 ○生徒間で技能差があるため、全体指導と併せて技能別での活動を取り入れていく。 ○仲間に声をかけ、励ますことができる生徒が多い。１学期は、個々の課題解決を行う授業が多かったので、２学期以降グループ活動を増やして	○整列や挨拶の徹底、ランニングや補強運動を継続的に実施することで、集団行動や体力の向上を図る。また、準備や片付けなどの用具の扱いやルールを指導し、安全に配慮させる。 ○視覚的にアプローチできるように教材を工夫し、運動に関する知識や運動技能の向上を図る。 ○全体指導で、基本技能の定着を図り、技能別活動を取り入れて、個々に合った技能の習得を目指す。 ○仲間のよさをみつけ、伝え合うことで、学習意欲の向上を図る。また、仲間のよい点を真似ることで、技能向上につなげる。	○毎時間、体育係の号令による整列や挨拶、声をそろえてのランニングや補強運動を継続的に実施する。各単元の始めに準備や片付けの仕方、その運動で起こりうるけが等を事前に指導する。 ○模範を示したりアクティブボード等を活用したりするなど、視覚的にアプローチして技能のポイントを説明し理解させる。 ○各単元の始めから中盤にかけては、全体指導の時間を多くとり基本技能や知識を身に付けさせ、中盤から終盤にかけては、それを活かして課題解決を行う時間を多くとる。 ○学習カードやタブレットを

		いく。		有効に活用させ、仲間のよさをみつけられるようにする。
技術・家庭	＜技術分野＞ ○ワークシート等を活用し、加工に関する技術の基礎的・基本的な知識、技能の定着を図る。 ○対話的な学習活動やレポートの作成等を通して、問題解決に必要な思考力・判断力・表現力を身につけさせる。 ○作業記録表や振り返りシート等を活用して、課題に対して粘り強く取り組む姿勢と自らの学習を調整する力を養う。 ＜家庭分野＞ ○授業の始めに復習や反復練習を行い、知識・技能の確実な定着を図る。本授業の目標をもたせることで、意欲・関心を高めさせる。 ○衣食住の基礎的・基本的な知識・技能の定着を図り、生活の中で主体的に実践しさらに応用・工夫できる能力の育成を図る。 ○習得した知識・技能を家庭生活の中で活かせる課題を設定し、実践し評価し、改善したことをワークシートにまとめ発表するなど、思考力、判断力、表現力を高める。	＜技術分野＞ ○木材加工の実習では、生活の問題を解決するために、意欲的に作品を考え、製作に取り組もうとする生徒が多い。授業アンケートの項目「意欲をもって取り組んでいますか」では 90%以上の生徒が肯定的な答えをしている。 ○等角図を作成する課題を協働で解決したり、自分が製作する作品について説明する発表活動等を班の中で行った。授業アンケートの項目「協力して取り組んでいますか」では 90%以上の生徒が肯定的な答えをしている。 ○学期末に振り返りシートに記入させ、振り返り活動を行った。授業アンケートの項目「より良くなるように考え、調整しながら取り組みましたか」では 90%以上の生徒が肯定的な答えをしている。 ＜家庭分野＞ ○前授業の復習を行い、本授業とのつながりや目標をもたせることで、理解しやすくなり、意欲・関心を持ち授業にのぞむ生徒が増えた。 ○基礎的な知識や技能を習得できている生徒が多いが、献立作成など知識を応用して組み立てる課題には苦手意識をもつ生徒が少なくない。 ○成長期である自分たちの毎日の食事に、栄養素についての知識を活かして健康な体づくりを心がけようと意識をする生徒が増えたが、調理の実習の機会を家庭でもとうとする生徒は少ない。	＜技術分野＞ ○木材加工で必要な語句、知識を身に着けさせ、工具の仕組みと効率的な使い方との関係を理解しながら作業をすることを通して技能の向上を図る。 ○木工作品の製作では、班を構成し、助け合い、教え合う活動を通して、思考力・判断力・表現力を養う。 ○振り返り活動を定期的に行うことで、粘り強さと調整する力を養う。 ＜家庭分野＞ ○学習に興味・関心をもたせるために、ICT を活用し理解しやすい授業を工夫する。 更に主体的に考察し、応用、発展した考え方ができる能力を育てる。 ○ICT を活用し課題に関係する例題を数多く用い理解させる。身近な生活の中の課題を設定し、自分で考え、判断し応用力を向上させる指導を行う。 ○日常生活の中で、自ら考え判断し実践する内容の課題を工夫し、体験学習を繰り返し行うことで基礎的技能の向上を図る。生活を工夫し創造しようとする実践的な態度を養う。	＜技術分野＞ ○ワークシートを作成し活用する。動画等を利用しながら丁寧な説明を行う。 ○協力、発表等ができるように、同じ作品を製作する者で班を作り、活動させていく。 ○作業記録表、振り返りシートを改善し活用する。問題解決が生徒自身でできるように、適切な支援をしていく。 ＜家庭分野＞ ○単元ごとにノートやワークシートで、、授業のまとめと復習を行う。応用力を求める課題を取り入れ、知識・技能の向上を図る。 ○調べ学習や家庭での体験学習の課題に取り組み、その結果をレポートにまとめ発表し合い、いろいろな考え方や発想を知ることで相互の能力の向上を図っていく。 ○長期休業中に食品や調理器具の扱い方、食品の選択、献立作成、調理実習など体験学習や調べ学習に取り組ませ、知識・技能の定着と思考力、判断力の向上を図る。